

東山文化

東山文化は 15 世紀後半における革新的な文化の象徴となりました。足利義政による東山山荘は、そのシンボリックな存在であり、山荘は現在銀閣寺として知られているものです。現在、能楽や、いけばな、茶の湯（茶道）、水墨画、そしてお香（香道）などの伝統的日本文化として知られるものの多くは、この時代に発展し始めました。これらの芸術は、不完全なものに美を見出しつつ、全てのものに対して非永久的な儚さを受け入れるという美的感覚から進化していったもので、禅宗の価値観とわびさび（素朴で不完全なもの、そして時がもたらす変化を愛でること）が融合したものです。

足利義政は熱心な芸術の支援者として、この新しい文化的繁栄の最前線にいた人物でした。応仁の乱の影響により日本で乱世が続く中、義政は軍事行動を指揮するよりも芸術を追求することを好みました。義政自身、書道や詩文に長けていましたが、彼の最大の才能は才能を見出し、芸術家を引き合わせる能力でした。別邸は、身分に関わらず様々な背景を持つ歌人・画家・知識人の集まる場所となりました。

東山山荘は、東山文化の象徴以上の意味を持ち、その建築とデザインは、わびさびの概念と文化的運動の価値観を象徴しています。東求堂の同仁斎にある書院造など、山荘の革新的な建築要素は、現在の日本建築に影響を与えています。